

シューメイカーの性質の形而上学

塩野直之
福井県立大学

性質の形而上学をめぐる議論においては、性質と法則の関係をどう考えるべきかについて、かねてより論争がある。一方では、アームストロングのように、物体が持つ性質はカテゴリーカルなものであり、法則はカテゴリーカルな性質の間に成り立つ偶然的な関係だと主張する者がいる。他方これに対して、シューメイカー、メラー、エリスらの提唱する性質の因果説は、性質とはそもそも因果力能にほかならず、したがっていかなる性質がいかなる法則を満たすかは必然的であると主張する。

この両者の対立がノミナルなものでなく真正のものであるためには、性質の因果説は、現実世界に存在する性質群以外の性質群が存在するような可能世界はないと主張しなければならない。なぜならば、もし現実世界に存在しない性質群が他の可能世界に存在し、それらが現実世界では成立しないような諸法則を満たすのだとすると、それは結局、アームストロング側の立場に立つ論者たちが、同一の性質が異なる可能世界で異なる法則を満たすと述べたのと実質的に大差ないこととなるからである。

シューメイカーは、想像可能性ないし思考可能性が、一般的に形而上学的可能性を含意するとは言えないと主張することによって、上の問題に答えようとする。そのような主張が正しければ、形而上学的に可能な世界とみなされるものの領域は大幅に削減され、性質の因果説は実質的な形而上学的テーゼとなるであろう。本発表において私は、このシューメイカーの方策を検討し、その射程と限界を指摘する。